

結核症と血液型

慶應義塾大學醫學部内科學教室 國立神奈川療養所

大塚 亮 一

(1) 緒 言

結核病と體質との關係に就いては從來多數の學者の研究せる所で、甚だ興味深い事である。而して體質につき考察するには、こゝに型態學的、遺傳學的、並に機能學的の三方面より研究すべきである。之を型態學的方面よりみるに、古今肺癆型乃至無力性體質として結核との關係を有することは世人の知る所であるが、かゝる體質が必ずしも結核に罹患し易いとは限らないのである事は周知の事實である。遺傳學的方面に就いては Diehl u. Verschuer の雙生兒の研究、並に Iekert u. Benze の結核家系につきその重要性を立證してゐる。更に機能學的方面に就いては最近最も注目せられる所で、殊に Klare u., Tr. Koester 等の強調してゐる過敏性體質につき、金澤の中村教授、大坂刀根山病院經部氏、更に坂本秀夫氏等その重要性を認めてゐる。

而して結核が以上の如く體質と密接な關係を有するとすれば、血清學的方面よりみた血液型につき考察する事は、遺傳學的更に機能學的方面を含有しての研究となるものである。結核病の體質につき血液型との關係を研究せるものは歐洲に於ては少ないが特筆すべきものはない。我國に於ては、住友氏の發表以外極めて少い。こゝに於て予は18歳乃至40歳の男子結核患者につき研究せる所を報告す。

(2) 検査方法

検査に供せる患者は昭和15年乃至昭和18年の間に傷痍軍人神奈川療養所に入所せる結核患者800名につき研究す。

検査に用ひた血清は三共標準血清を用ひ、製造後2ヶ月以内、至温攝氏20度以上で行ひ、寒性凝集反應を除去し、その標準血清は明瞭なる反應を

有する血清を使用した。患者の耳朶より取つた血液は、載物硝子の上で標準血清と混和後三分間で、肉眼又はループを用ひ判讀した。

(3) 検査成績

その成績を考察するに結核患者800名の血液型は第1表の如くにして之を日本人平均更に東京附近平均の血液型に比較すると第2表の如くで、B型に於て結核患者や、多い様なり。

第1表 患者總數血液型比較

血液型	O	A	B	AB	計
患者					
患者實數	240	280	208	72	800
患者百分率	30.0%	35.0%	26.0%	9.0%	100%

第2表 日本人血液型と患者との比較

血液型	検査人員	O%	A%	B%	AB%
日本人					
日本人平均(古畑)	29480	30.86	37.69	21.79	9.68
東京附近總數	5500	31.3 ± 0.62	37.62 ± 0.65	21.6 ± 0.56	9.36 ± 0.46
結核患者	800	30.0 ± 1.62	35.0 ± 1.068	26.0 ± 1.55	9.0 ± 1.05

次に各血液型別に既往症並に現在に於て咯血血液のあつた患者を検したのに第3表の如くB型に多く、AB型に少い様なり。

第3表 各血液型別に於ける咯血血液者比較

血液型	O	A	B	AB	計
患者					
患者數	240	280	208	72	800
咯血者數	61	59	60	15	195
血痰者數	56	76	46	18	196
咯血血痰者總數	117	135	106	33	391
百分率	48.0 ± 3.23	48.0 ± 2.98	51.0 ± 3.46	45.8 ± 5.43	平均 48.0%

次に空洞との關係につき檢したのに第4表の如く、B型に於て空洞患者多くAB型に少い様である。

第4表 患者空洞形成比較

患者	血液型	O	A	B	AB	計
患者数		240	280	208	72	800
空洞所有者数		69	79	63	18	223
百分率		28.8±2.92	28.3±2.69	30.3±3.16	25.0±5.1	平均27.9%

以上第3表第4表よりして、咯血、血痰の経験多いB型患者に空洞所有者が多く、咯血血痰の経験の少ないA B型患者に空洞少ない点極めて合理的なるを認めた。

次に「レーベルヒ」原案を基礎とせる軍事保護院肺結核分類法(第5表)により、血液型別に肺結核を分類したるに、混合型肺癆は第6表の如くA型に多く、A B型に少い様なり。

第5表 軍事保護院肺結核分類法

臨床基本病型	
第I型、初期結核、A 初期變化群、B 肺門淋巴腺結核、C 初期浸潤性結核	
第II型、播種性結核、A 粟粒結核(急性、亞急性及び慢性) B 慢性播種性結核	
第III型、浸潤性肺結核、A 撒布ナシ、B 撒布アリ	
第IV型、大葉性肺炎性及び気管枝肺炎性結核	
第V型、結節性(細葉性、増殖性)肺結核	
第VI型、混合型肺癆	
第VII型、硬化性肺結核	
第VIII型、肋膜炎、A 罹患中のもの、B 高度の肋膜肥厚を以て治癒せるもの、C 痕跡を以て治癒せるもの	
第IX型、病型判定のよるべき「レ」線所見なきもの	

第6表 混合型肺結核患者比較

患者	血液型	O	A	B	AB
患者数		240	280	208	72
混合型肺結核患者数		46	60	37	11
百分率		19.1±2.53	21.4±2.46	17.8±2.66	15.3±4.17

次に比較的軽症患者と思考される結節性肺結核に於ては第7表の如くA型に少く、A B型に多い様なり。

次に浸潤性肺結核にして撒布を有する第III型(B)なる病型の患者を検したのに第8表の如く各

血液型につき著しい差位を認めなかつた。

第7表 結節性肺結核患者比較

患者	血液型	O	A	B	AB
患者数		240	280	208	72
結節性肺結核患者数		96	102	85	32
百分率		40.0±3.16	36.4±2.23	40.9±3.4	44.0±5.3

第8表 浸潤性肺結核(撒布あり)患者の比較

患者	血液型	O	A	B	AB
患者数		240	280	208	72
浸潤性肺結核患者数		56	65	43	18
百分率		23.0±2.72	23.2±2.52	25.0±3.0	25.0±2.51

以上3型は肺結核中最も多数を占むるも他の病型は比較的少く、統計上支障を來たす恐れあるによりあへて記述せず。

次に患者中肋膜炎を經過せるもの及び罹患中の患者は第9表の如くA B型に多く、B型に少し。

第9表 肋膜炎患者の比較

患者	血液型	O	A	B	AB
患者数		240	280	208	72
肋膜炎罹患患者数		60	88	49	24
百分率		25.0±2.79	31.4±2.77	23.5±2.87	33.3±5.55

次に骨結核を主とし又は合併せる患者数は第10表の如く、O型、A型に多し。

第10表 血液型別による骨結核患者比較

患者	血液型	O	A	B	AB
患者数		240	280	208	72
骨結核患者数		20	25	10	4
百分率		8.3±1.8	8.2±1.64	4.8±1.48	5.5±2.63

更に全患者中死亡せるもの血液型検査後1ヶ月間に於て、O型28名、A型33名、B型17名、A B型3名にして之を百分率に示せばO型11.7%A型12%B型8.1%A B型4.2%なり。全死亡者中肋膜炎にて死の轉歸をとるもの、O型4名A型A B型、各1名計6名にして例數少く、確たる判定をなし得ないがO型に於て特に多い様である。

(4) 總 括

以上により、1、血液型と結核患者との関係に於て之を誤差論より論ずれば、結核は各血液型に大體平等に浸襲する様であるがB型に於て罹患率高い傾向を有する様である。然して、罹患後に於ける経過に就いては、凡そ次の如き傾向を有するものである。

2、咯血、血痰患者はB型に比較的多く、A B型に少い如し。3、空洞を有する患者はB型に比較的多く、A B型に少い如し。4、混合型肺癆はA型に於て比較的多く、A B型に於て少い如し。5、結節性肺結核はA型に比較的少く、A B型に多い。6、浸潤性肺結核にして氣管枝性撒布病型は血液型の差位を見出し得ない。7、肋膜炎に罹患せるものA B型に於て最も多く、B型に於て最も少い。8、骨結核を有するものO型、A型に多し。9、死亡の轉歸をとれるもの、O型、A型に多く、A B型に少い。10、全患者中腦膜炎の轉歸をとれるものO型に於て最も多し。

(5) 結 論

結核症の蔓延は各血液型に殆んど一様に浸襲するが如きも、B型に於て罹患率高い傾向を有し、結核に罹患せる場合、特に著しい進展に差位を認めぬがその間各血液型に於て、多少相違せる傾向は之を認めうべく、空洞を有するもの、従つて咯血血痰を有するものはB型に多く、混合型肺癆の如き重症な経過をたどり従つて死の轉歸をたるとはA型に多い。A B型に於て肺結核に對して良好な経過をたどるもの多い様で、肋膜炎の罹患率はかへつてA B型に多くてB型に少い、骨結核はO型A型に多く、腦膜炎はO型に於て特に多く、従つてO型も又A型と同様結核に對する死亡率は自ら高率となる。

擧筆するに臨み、御校閱を賜りし大森教授、石田教授に敬意を表し併せて黒川所長の御指導を謝す。

文 献

- (1) Dichl u Verschuer: Zwillingstuberculose. 1923. Der Erbereinfluß bei der Tuberculose. 1936.
- (2) Ickert u Benze: Stammbäume mith Tuberculösen. 1933.
- (3) 荻部一衛: 結核、第18巻第4號、昭和15年4月、第19巻第7號、昭和19年7月、第20巻第7號、昭和20年7月
- (4) Klare u Koester: Konstitutionsschule. 1940.
- (5) 坂本秀夫: 大日本結核全書第8輯、肺結核の早期檢診法、昭和17年
- (6) 古畑種基、市田賢吉、岸孝義: 人類同種血球凝集反應の法醫學的應用に就て、社會醫學雜誌 468號、大正15年
- (7) 奥田義正: 結核性疾患と血液類屬、東京醫事新誌 2585號、昭和3年
- (8) 住友曄: 肺結核患者の血液型に就て、結核第8巻第5號、昭和5年、結核第9巻第5號、昭和6年
- (9) 岩原寅猪: 骨結核患者の血液型に關する研究、結核第9巻第4號及び第6號、昭和6年
- (10) Dieselben: Zit. im Zeits. f. Tbk. Bd. 50, Zit. im Zeits. f. Tbk. Bd. 53.
- (11) P. A. Schmitt: Deutsch. med. wochs. 1928.
- (12) M. M. Alperin: Beit. Klin. Tbk. Bd. 64.
- (13) 古賀伊一郎: 日本人の血液類型と黴毒感染率との關係に就て、東京醫事新誌2608號 昭和4年
- (14) 寺田秀男: 癌腫と血液型との關係並に血液型上より觀たる癌腫發生素因に就て、癌、第23年、第3號、昭和4年
- (15) 王丸勇: 各種精神疾患に於ける血液型に就て、神經學雜誌29巻1號、昭和3年
- (16) 小松原謙三: 寒冷に依つて發現する健康血球凝集素に就て、醫海事報1702、1703號、昭和2年
- (17) 東京女子醫專法醫學教室、無料診療所血液部: 東京女子醫專特防團學校部に於ける血液型檢査實施、女醫界367號118、昭和18年10月
- (18) 關根卯三郎、小此木信治、安富一夫: 工場従業員の血液型並に黴毒反應檢査成績(1)日本科學會雜誌36巻10號281 昭和18年10月
- (19) 相澤豐三、古館常四郎: 過敏性體質と結核との關係に就て、診斷と治療 第13巻、第7號、昭和18年
- (20) 軍事保護院: 軍事保護院肺結核分類法 昭和18年2月